

メイントピックス

ジャパンファウンデーションは、2004年度も未知の分野からメジャーなテーマまで幅広く焦点を当てながら、諸外国との文化芸術交流を展開してきました。注目を浴びる日本の“おたく”文化の海外紹介から、戦火が消えぬイラクの演劇・音楽の公演、中東・アラブ世界の映画祭や南アジア演劇の上演まで。対象とする題材の広がりをお伝えしながら、日本と世界の多様な文化芸術の交流の模様をご覧ください。

ヴェネチア・ビエンナーレ

「おたく：人格＝空間＝都市」をテーマにユニークな都市論を展開。

2004年9月12日から11月7日まで、第9回ヴェネチアビエンナーレ国際建築展日本館（カステッロ公園内、ヴェネチア）において、「おたく：人格＝空間＝都市」展が開催されました。

本展は、秋葉原という都市をテーマとして取りあげ、その都市空間が、いかに「おたく」という人格によって形成されてきたかを問うユニークな都市論を、日本館というスペースの中で展開したものです。

「おたく」といえば、まず、本やCD、フィギュアなど、おたくが好むモノが乱雑に溢れている個室をイメージしますが、「おたく」という人格が作り上げる独特の個室をミニチュアサイズで再現しました。さらに、数十万人が集うコミック・マーケットや秋葉原の都市空間、「おたく」の国際的な広がりを出すものとして、韓国のネット空間などを連続した箱庭として表現しました。

いわゆるオーソドックスな建築展を展開したイギリスやドイツなどの他国のパビリオン

に比べ、「おたく」の独特の世界を表現した日本館は、フィギュアやゲームポスターなどの展示物を配し、海外の観客からも好評を得ることができました。

テレビ放映のほか国内でも展覧会を開催し、好評。

もともと、ヴェネチアビエンナーレ建築展の日本館テーマとして、日本国内ではネガティブなイメージが強かった「おたく」を取りあげることは是非については、賛否両論がありました。

しかし、結果的に、漫画やアニメーションなどの海外の人気ぶりとも合い通じる現代日本文化の一断面を、国際的な汎用性とともに示すことができたことは、これまでにない大きな成果といえます。

また、このヴェネチアでの展示の様子は、NHK日曜美術館など、国内のメディアでも特集されました。

さらに、国内においても、ぜひ展覧会を見たいという一般の方々からの強い要望に応えるため、東京都写真美術館との共催で、2005年2月5日から3月13日まで、日本帰国展を開催

しました。会期終了間際には、入り口に行列ができるほどの動員数を擁し、こちらも大盛況のうちに幕を閉じることができました。

現代日本文化の一断面である「おたく趣味」が国際的趣味へ。

「おたく：人格＝空間＝都市」展では、アニメや漫画、ゲームなどのメディア横断的な特徴を持つ「おたく趣味」が、特有の自意識とセクシュアリティを背景に、海外にまで越境する国際的趣味となってきた状況を示し、国内外において、それぞれ大きな反響を得ることができました。

また、この展覧会を機に制作された限定フィギュア付きカタログは、幻冬社より出版され、すでに完売となりましたが、一時は、あのハリポッターを抜く予約を獲得するなどの人気商品となりました。

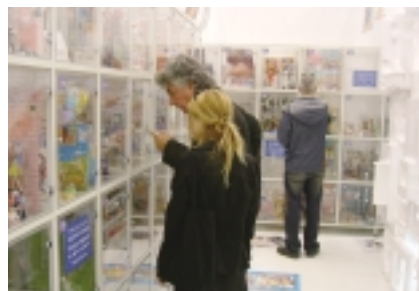
本展のコミッションナーは森川嘉一郎、参加作家は、丹下健三、岡田斗司夫、海洋堂、大嶋優木、斎藤環、開発好明、コミックマーケット準備会、宣政佑、よつばスタジオ（敬称略）です。



「秋葉原の箱庭」の前で、観客に解説する森川嘉一郎コミッションナー（日本館内）



日本館入り口



レンタル・ショーケースに見入る観客

イラクの演劇と「ウード」奏者の公演、教員の招へい

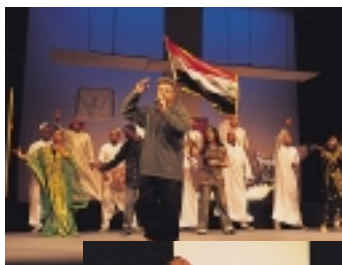
イラク・アラブの文化理解をめざし イラク現代演劇公演。

イラクはフセインの独裁政権が崩壊した後も、テロの激化や治安の悪化により、いまだに混乱状態にあります。そうした状況のなか、ジャパンファウンデーションでは10月にバグダッドのアル・ムルワッス劇団を、11月にアラブの伝統的弦楽器「ウード」の演奏者であるイラク出身のナスィール・シャンマ氏を招いて、公演・シンポジウムを行ないました。

こうした公演はイラクの「今」を日本国民に伝えるだけでなく、イラクやアラブの文化理解をめざして開催され、両事業ともにマスメディアでも大きくとりあげられるなど、高い注目を集めました。実際にこの2つの公演は、多くの日本国民にイラクの現状を伝える効果があったことはもちろん、同時にイラクならびに中東アラブの文化水準の高さも伝える役目を果たし、予想以上の成果をあげています。両事業ともにイラクの平和と安定を願う意味でも、重要な公演であったといえるでしょう。

アル・ムルワッス劇団の公演は、2004年10月6日から24日の間に、東京では国際交流基金フォーラムと共催のタイニアリスで各3回ずつ、さらに名古屋千種小劇場で3回、大阪アリス零番館・ISTで6回と精力的に行なわれ合計15回の公演に、東京でのシンポジウムをあわせ、合計で1,343名を動員しました。

いずれの公演も観客の評判は上々で、大きな成功を収めました。イラク・バグダッドより、十分な事前調査ができないなどの数々の困難を乗り越えて19名からなる劇団を日本へ初めて招へいた点は、評価に値するのではないのでしょうか。



アル・ムルワッス公演の様子



埼玉県の中学校を訪問するイラクからの教員

伝統的弦楽器「ウード」の コンサートを開催。

カイロ在住ながらイラクを代表するウード奏者（アラブの伝統的弦楽器）ナスィール・シャンマが率いる音楽グループを招いて行なわれた公演は、2004年11月26日から12月3日の間に行なわれ、動員数は1,415名を記録。多くの観客がその未体験の音色に酔いしれました。

本人の強い希望により、被爆地である広島（メルカつきまちホール）と長崎（ゲバントホール）で1回ずつコンサートを開催。さらに国際交流基金フォーラムで2回、それに加えて東京で1回のセミナーと記者会見用の1回の公演が実現しました。

ナスィール・シャンマの音楽性は非常に高く、各地で絶賛のうち公演を終了。アンケートの回収率や結果からも各公演地の観客からはかなりの高い評価を得ていることがわかりました。



ナスィール・シャンマ公演の様子

イラクからの中学・高校教員 グループの招へいを実施。

中学・高校教員グループ招へいは、1973年から毎年実施している主要事業の一つであり、これまでに全世界から招へいされた社会科教員などの数は7,000人にのぼります。本事業はその一環として、イラク・サマーワ地域から社会科教員10名と教育行政官4名を招へいしました。外務省・文部科学省、埼玉県教育委員会を訪問し、県内の小・中学校で生徒や教員との交流も体験しました。また、日本語国際センターでの華道デモンストレーション体験や日本の教育に関するレクチャーの受講、江戸東京博物館・関西国際空港の視察など精力的にこなしました。ちょうど同時期外務省の招へいで来日し、研修を行っていたムサンナー県テレビ局クルーが一部日程に同行し、先生方の交流風景を撮影する一場面もありました。

一行の学校訪問の様子は日本の新聞やテレビでもニュースとして報じられ、イラクへの関心の高さをうかがわせるとともに、日本ではあまり知られていないイラクの教育事情について知る良い機会ともなりました。一行は帰国にあたり、来日の成果を広く関係者と共有したいと熱く語るなど、日本の教育に大きな影響を受けたようです。

映画祭

日本人のアジア・中東理解の促進をめざし、特集上映や講演会を実施。

映像出版課は、海外日本映画祭や出版事業と共に、国内での映画祭・上映会も主催しています。2004年度は、旧アジアセンター以来継続しているアジア・中東映画の上映会と、新たに開始した英語字幕付き日本映画上映会を大きな二本柱として、各種イベントを実施しました。

まず、日本人のアラブ・イスラームに対する理解の促進が急務とされることから、これまで馴染みの薄かった中東・アラブ世界の映画の紹介・普及に力点を置いたイベントを次の内容で行ないました。

「国際交流基金映画講座2004 - 2 : アラブ映画祭イベント(2004年9月)」と「同2005 - 1 : アラブ映画祭イベント2(2005年2月)」では、これまで日本に紹介されてきたアラブ映画の上映に加え、専門家によるイラク報道やレバノン映画史をテーマとした講演を同時開催しました。さらに、「イベント2」では、パレスチナ出身のミシェル・クレイフィとイスラエル出身のエイアル・シヴァンが共同監督した4時間半の長編ドキュメンタリー『ルート181 パレスチナ - イスラエルの旅の断章』の上映を行ない、パレスチナ問題に関心を寄せる層を中心に、多くの観客を集めました。

なお、これらの集大成として「アラブ映画



「国際交流基金映画講座2005-1」で行なわれたナジール・エルカシュ氏の講演「世界のメディアにおけるイラク、中東メディアにおけるイラク」

祭2005(2005年4月実施)」を実施しました。(詳細は来年度版の本誌に掲載予定)

また、文化庁文化交流使としてイスラエルに滞した四方田犬彦氏(明治学院大学教授)の帰朝講演会を中心にした「国際交流基金映画講座2004 - 1 : シオニズムと映画(2004年8月)」では、貴重な映像資料を参照しながら、イスラエル映画の誕生から現在までを俯瞰し、馴染みの薄いイスラエル映画に対する理解の促進をめざしました。

アジア映画については、福岡市総合図書館との共催で、「香港映画の黄金時代 : ブルース・リーを撮った男 キャメラマン西本正の伝説(2004年11~12月)」を実施。映画全盛期の1960年代に香港映画界に招かれてから、ブルース・リーの信頼を得て『ドラゴンへの道』『死亡遊戯』はじめリー作品の撮影を担当するまでの西本正(1921-97)の軌跡を追い、『東海道四谷怪談』『ドラゴンへの道』など7本を上映。さらに、山根貞男氏(東海大学教授)や西本照子氏(西本正夫人)による対談や講演も実施しました。また、本事業と連動して、筑摩書房から西本正/山田宏一・山根貞男著『香港への道 中川信夫からブルース・リーへ』も出版されました。

英語字幕付き日本映画上映会を在留外国人向けにシリーズ化。

日本映画は、一部の映画祭を除くと英語字幕付きで上映される機会がなく、大半のDVDにも字幕がないため、在留外国人にとっては大きなハードルとなっています。

この現状を改善しようと、在留外国人にも日本映画に接してもらうことを目的とし、海外上映用の当基金フィルム・ライブラリーを活用する「英語字幕付き日本映画上映会」シリーズを新たに開始。第1回「日本映画の巨匠と女優たち」(2004年6月)、第2回「にっぽん60年代 巨匠たちの原点」(2005年3月)の2回の上映会を行ないました。

第1回は、黒澤明、溝口健二、清水宏など一時代を築いた巨匠たちの名作を並べ、日本映画を海外へ紹介した先駆者、ドナルド・リチャー氏(映画評論家)による講演を実施。なかでも、黒澤明の『白痴』には400人近い観客が来場する盛況となりました。

第2回は、今なお第一線で活躍する山田洋次、吉田喜重、篠田正浩らが、デビュー当時の1960年代に撮った作品を上映すると共に、『日本脱出』の上映後に、吉田喜重監督の講演会を実施。高度経済成長、環境破壊、東京オリンピック、学生運動の高揚、テレビの普及、映画界の斜陽化などが同時に進行し、日本社会の転換期となった60年代を再考する機会となりました。



「香港映画の黄金時代」「英語字幕付き日本映画上映会」チラシ

まちづくり専門家グループの招へい

世界各国から「まちづくり」の専門家を招き、交流の場を提供。

市民青少年交流課はジャンルや地域の区分を超えた複合的な文化交流を「ひととくらし」「その主役たる市民青少年」を軸に幅広く展開するために2004年に新設されました。そのプログラムの一つとして、世界各国で「まちづくり」に携わる指導者を招待し、関係者との交流の場を提供するのがこのシリーズです。初年度はインド・ブータン、EUの2グループを招へいしました。いずれも「まち」を都市に限らず、「市民が日常生活を営む場＝総合的文化環境」ととらえ、そこに存在する文化財・景観・文化行事などの文化資産や市民活動によって「まち」が生き続け、にぎわい続けることの意味を市民参加・青少年育成の視点から様々な考察するものです。



奈良まちづくりセンターにて（インド・ブータン）

インド・ブータンとEU各国のそれぞれの試みの報告と考察。

インド・ブータンまちづくり専門家グループは「ひとを育み、まちをつくる：『文化の創造的継承』の先駆的試みを考える」をテーマに都市計画、景観保全、青少年教育、文化政策、法律、文化財修復、市民啓発活動などの専門家8名を2004年11月30日から12月14日までの期間招へいしました。アーメダバードやボンディシェリーといったインドの地方都市での先駆的なまちづくりと市民参加啓発、ブータンにおける無形・有形の伝統文化の創造的継承の新たな試みなど、日本でほとんど知られていない情報を関係者が共有する貴重な機会となりました。

EUまちづくり専門家グループは「ひとは市民となり、まちのにぎわいを創り出す：豊



基金国際会議場でのシンポジウム

かさを共有するしくみとしての文化」をテーマに、スペイン・フィンランド・英国（スコットランド）・ハンガリーから環境経済学、地理・地勢学、都市計画、地域通貨、文化事業運営などの5名の専門家を2005年3月19日から3月31日までの期間招へいしました。バルト三国と強く結びついたフィンランドやスペイン・カタルーニャ地方など地理的・文化的複合性の強い地域の特性や地域通貨「レッツ」などの市民主体のボランタリー・ツール、またEU新規加盟国の立場などを生かした、多面的な発表がなされました。それぞれに、新たな都市の活性化をめざし、「地域」と「市民」のアイデンティティ模索と「持続可能な豊かなまちづくり」を試みる仕掛け人たちが、新たな時代に生きる市民として自らの手でまちの豊かさににぎわいを生みだすにつづけることについて、日・EUの視点から議論しました。また、2005年3月29日には千葉大学21世紀COEプログラム『持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点』との共催によるシンポジウムを開催しました。ボーダーレスの時代を迎え、境界のゆるぐEU地域政策の現状とそのなかでの市民の役割に関する突っ込んだ議論が行なわれ、まちづくりの新たな可能性を考える機会となりました。

文化人招へい

出会いと発見を目的に海外文化人を招へい。

プログラムの目的は、出会いと発見です。「文化芸術事業」の基本方針として、「可能な限り多くの人々の感性に訴えて発見を促し共感を引き出し・・・日本理解の増進をめざす」と謳っている通り、これまで日本との接点がなかった海外の文化人を日本に招き、日本文化に触れ、日本人と交流する機会を提供するこのプログラムは、感性に訴えるタイプの代表的な文化交流事業といえます。

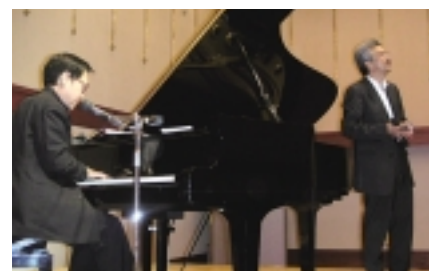
2003年衝撃のデビュー作「父、帰る」で、ベネチア映画祭の新人監督賞とグランプリ金獅子賞を一举に受賞したロシアの映画監督アンドレイ・ズヴァギンツェフ氏は、2005年1月に来日し、夫人とともに、京都・広島・宮島・松島・富士山・箱根・東京と、10日間で日本を駆け巡りました。帰国後「雪の松島。世界で一番美しい場所ようやくたどり着いた、という気がする」との感想を送ってきま

した。監督は前々から芭蕉や曾良の俳句をロシア語訳で愛読し、胸中に日本のイメージを育てていたのです。

2004年9月に招いた韓国の趙英男（チョ・ヨンナム）氏は、韓国を代表する流行歌手であり美術家ですが、従来日本との関わりがなく、むしろ日本に対してネガティブなイメージを抱いていました。日韓ワールドカップサッカーをきっかけに芽生えた日本への関心を携え、10日間の訪日を実現。そのなかで、靖国神社を「視察」したり、多様な日本の文化と人間に接しました。仙台では、ファンのために、パーソナルなコンサートも開催しました。帰国後の便りには、「訪日の経験は私の余生に大きな影響を与えました。私は今後韓国で日本を知らせる役割を担うことになるでしょう」とあります。翌年春には、韓国と日本で「殴り殺される覚悟で書いた親日宣言」を刊行し、従来の日本観に一石を投じて話題を呼びましたが、韓国国内では、マスコミの誤報道から生じた非難騒ぎに巻き込まれる残念な事

態も起きました。感性の文化交流も試行錯誤の連続ですが、チョ・ヨンナム氏の出会いと発見が、長い時間を経て熟成されることを期待したいものです。

前出のズヴァギンツェフ監督のもう一つの言葉を紹介しましょう。「日本では私の中にさまざまな発想が生まれたが、それはまだ完成されたものではない。しかし、これだけは言っておきたい。創作活動をしている人々にこのような素晴らしい機会を、営利を目的とせずと与えてくれるジャパンファウンデーションのような団体が存在することが、私はうれしい。」



趙英男氏によるコンサート

Have We Met? 見知らぬ君へ展

アジアの若手キュレーターによる 新感覚の展覧会を開催。

1980年代後半以降の経済発展はアジアの社会・文化に大きな変化をもたらしましたが、90年代以降のグローバルなデジタルテクノロジーの進化は、さらにその変化を加速しています。こうした文化環境のなかで、特に高度経済成長期に成長した20～30代の若い世代は、TV番組やアニメ、ポップスその他のサブカルチャーを共通体験として持ち、各国の文化環境の違いがあるとはいえ、芸術文化の分野でも、共有された同時代感覚が指摘されています。

ジャパンファウンデーションでは、アジアのこのような現状を踏まえ、アジア地域の若い世代の美術関係者のネットワーク形成を目的に、2002年度、2003年度と新感覚の展覧会を紹介してきましたが、2004年度「Have We Met? 見知らぬ君へ」では、日本と東南アジア・南アジアに焦点を当て、インド、インドネシア、タイ、日本の若手キュレーター4名が共同で14名の作家と作品を選び、展示内容を構成しました。各国のキュレーター

はいずれもグローバルな視点を持ちつつ、ローカルな美術環境のなかで様々な企画とプロジェクトを通じてアジアの確かな「今」を表現している新進の人材です。

展覧会は、ジャパンファウンデーションの単独主催により、2004年12月11日から2005年1月30日まで国際交流基金フォーラムで実施。開館日は全33日間にわたり、2,886名（一日平均85名）に上る入場者を集めました。またアンケート集計数は全入場者数の20%にあたる589名を数え、その95%が「大変よかった、よかった」の項目に該当し、高い評価を得ることができました。観客層は長年、国際交流基金フォーラムの展覧会を見続けてきた人から今回初めての人までさまざまでしたが、多くが10代から20代、30代にかけての若年層でした。また、現代美術に親しんだ人々のほか、サブカルチャー的要素の強い作品や「かわいい」傾向の作品の影響からか、子供のいる家族連れや若い女性が多かったのも特徴でした。

同時代のアジアの現代美術を見る眼も確実に変化しており、アジアという地域の特殊な美術を見にきたというより、同時代の普通の

現代美術展を見に来たというカジュアルな感覚で訪れる人々が増えてきました。同時代のアジアの文化・芸術を紹介してきた旧アジアセンター事業の一つの成果がここに見てとれます。その変化は、朝日新聞に掲載された次の展覧会評が端的に指摘しています。「90年代、アジアの現代美術は躍進した。それを見て育った新しい世代の美術家や展示企画者たちが活躍を始めた。今回4カ国から選ばれた4人の企画者たちもそうだ。彼らは、アジアを起点に新しい隣人関係を作ろうとしているようだ。展覧会名は、そのための軽やかで慎み深い、出会いのあいさつということだろう。」（朝日新聞2005年1月20日(木)夕刊12頁）



Have We Met? 展示風景（国際交流基金フォーラム）

日米交流150周年事業 「大太平洋序曲」

宮本亜門氏演出のミュージカルを ブロードウェイで上演。

日本と米国、太平洋を隔てた両国の出会いから150年後の2004年、日本の開国を題材にしたミュージカル「大太平洋序曲」が宮本亜門氏の演出によりブロードウェイで上演され、ジャパンファウンデーションは特別協力という形でサポートしました。

「大太平洋序曲」は、1853年の黒船来航以降の日本の急速な近代化を描いた作品です。さまざまな状況におかれた日本人が、開国とどのようにかわり、その時何を考えたかを描いたミュージカルで、初演は1976年でした。宮本氏は2002年にこの作品をニューヨークにて日本人のキャストで上演し、成功を収めました。今回、同じミュージカルを、アメリカ人のキャストで上演したということで、内外で大いに注目を集めました。

2004年12月2日のオープニングに先立って、9月22日にはボストン美術館で公開シンポジウム「MIT Meets Broadway」が開催され、宮本氏と米国歴史学界の重鎮であるジョン・W・ダワー教授とが日米交流の原点について語り合いました。

2005年3月2日にはジャパンファウンデーション本部で講演会が行なわれ、宮本氏はこの作品で伝えたかったことを「歴史とは、その時、そこに生きている人がつくっていくものである。つまり、日本の開国を体験した、さまざまな人間が歴史をつくっている」とまとめました。

ニューヨークでの公演が2回目となるベテラン演出家の宮本氏ですが、今回の経験について「(稽古中) 悩みなんかなかったといえたらよかったが、現実はそのようではなかった」といいます。

「午前11時に始まる稽古のために、朝はほぼ5時に起床。台本を頭に入れた上で、それをキャストに伝えるためのアイデアを練りはじめます。ステージでのアクションを、どうやって役者が共感呼び起こす言葉で表現し演技をしようか。鋭い感受性を持っているキャストそれぞれから、何を引き出すか、考えをめぐらす。うまく(台本にあることを)表現できていない役者に、どうやって気持ちを伝えるか、相手をコントロールするのではなく、五感、六感を引き出す、そのために多くの時間を費やす。それからようやく稽古に入るという一日のスケジュール。これを3カ

月も続けた」。

違う考え方、違う生き方をした人たちと一緒に作品を作ることが何より勉強になったという宮本氏。「大太平洋序曲」は、前回日本人のキャストで上演した時には生じなかった、さまざまな文化的相違を乗り越えてできなかったものでした。

このミュージカルは話題を呼び、2004年12月2日から翌年1月31日までの会期中に7万人が足を運びました。



ジャパンファウンデーション本部で開催された制作発表会（2004年7月）

「大太平洋序曲」ポスター

南アジア演劇

南アジア各国の若手演出家5人が
創りだした現代演劇。

これまで演劇交流の立ち遅れていた南アジア（インド、スリランカ、ネパール、パキスタン、バングラデシュ）との共同作業を実現しました。国際コラボレーションの新たな可能性を探ることを目的として、各国1名ずつ計5名の演出家が、同等の権利と責任の下に共同で一つの作品を創造するという方法論を取りました。2003年度には、各国演劇事情の調査や演出家の選定、全演出家の作品の紹介（日本公演）を行ない、2004年度に共同作業から上演までを実施しました。先鋭的な仕事をしている若手で、かつ他者との共同作業に強いモチベーションを有している者、との観点で選定した5人の演出家は、インドがアピラシュ・ピライ、バングラデシュがアザッド・アブル・カラム、ネパールがアヌーブ・バラール、パキスタンがイブラヒム・クレイシー、

スリランカがルワンティ・ディ・チケラ。これに、映像作家、音楽家、衣装デザイナーなどのクリエイティブ・スタッフが加わり、マルチ・メディア作品に仕上げています。

作品は、中央アジアに生まれ、1526年にインドにムガル帝国を開いた人物、パーブルに着想を得た、「物語の記憶 サマルカンド・カーブル・ヒンドゥスターン」。25年にわたってひたすらインドをめざして各地を侵攻したパーブルという人物を通し、現代を照射しようとする試みです。

初演は2004年11月25日から27日まで国際交流基金フォーラム、同年12月1日から2日まで京都芸術劇場・春秋座で上演されました。また、2005年1月6日にインド・ニューデリーで、同国最大の現代演劇祭「National School of Dramaフェスティバル」のオープニングを飾り、大きな反響を呼びました。



「物語の記憶 サマルカンド・カーブル・ヒンドゥスターン」公演の様子

劇団「風の子」インドネシア・東ティモール公演

日本文化の紹介と、子供たちの
メンタル・ケアを目的に公演。

東ティモールは1999年8月の住民投票で、インドネシア国内に留まるか独立かを問われ、8割近い市民が独立を選択しましたが、その結果が判明した直後から治安が一気に悪化し、独立に反対する併合派民兵によると思われる発砲、殺害、放火などの破壊行為が起きました。この過程で25万人を超える人々が西ティモールへ避難し、大量の避難民が発生しましたが、東ティモールは2002年5月に独立し、関係機関の努力もあり西ティモールに流入した人々も大半が帰還を果たしました。こうした成果からUNHCRは2003年1月より西ティモールに避難していた東ティモール住民の難民認定を解消しています。

一方で、西ティモール、特に国境の街アタム・ブアや、東ヌサ・トゥンガラ州都のクバ

ンには、推計5万を超えるとも言われる東ティモールからの元避難民が生活しており、その一部がいまだにキャンプで暮らし、子供が教育や芸術に触れる機会が制限された状態が続いています。このような事態をうけ、インドネシアの西ティモールや建国間もない東ティモールにおいて、2005年3月18日から25日まで地域の復興と子供の心のケアや情操教育を目指し、子供を対象とした芸術事業を実施しました。

今回の事業は単なる日本文化紹介でなく、心に傷を負った子供たちへのメンタル・ケアにも注目することで、この地域の平和構築に少しでも役立つものとなる内容構成を考えました。その結果、子供向けの演劇活動を行っている劇団「風の子」の公演とワークショップを、元避難民が多く住むインドネシアの東ヌサ・トゥンガラ州ペルー県アタンブア、東ティモールのディリの2都市で実現。劇団

「風の子」の演劇公演には、各公演地で小学校入学前から中学生くらいまでさまざまな年代の子供が劇場に詰めかけました。舞台上上がった3名の役者の一挙手一投足を見つめていた彼らの楽しそうな表情は深く印象に残っています。

また、公演の合間に訪問した元避難民が居住するキャンプや東ティモールの海岸でも、子供たちが「風の子」のメンバーを生き生きとした表情で迎え、メンバーがリードする手や体を使った遊びに熱中していました。本事業では、演劇公演を通じた直接的な心のケアのほか、教育の現場でも情操教育が持続的に行なわれていくことを願い、バナナの葉や新聞紙など身近なものを創造的に教育現場で活用していく方法を考えるワークショップを、地元の教育関係者を対象に開きました。



「風の子」公演より



「風の子」公演を楽しそうに見入る子供たち



キャンプを訪れた「風の子」メンバー

異文化理解講座

幅広い視点からの講座は大反響
アジア地域への高い関心が明確に。

中東地域およびイスラームに関する高い関心を背景に、2003年度の2講座に引き続き、2004年度は「中東理解講座」など8講座を開講しました。日本では馴染みのなかった中東地域の文化面の切り口も重視し、ニュース報道で注目を集めている地域・テーマばかりではなく幅広い内容に設定。その結果、「岐路に立つ中東」、「マグリブ世界を知ろう」、「イ

ランを知ろう」、「スーフィー・聖者・精霊の世界」など、延べ472名が受講。1995年以来実施している「アジア理解講座」も7講座を行ない、「アジアの布と社会」など、延べ367名が受講、アジア地域への高い関心が引き続き示されました。

2004年度は、機構改革により、旧アジアセンターのあった赤坂ツインタワービルからの移転と改装工事のため、5月からの第1期を実施せず、9月下旬からの第2期と1月からの第3期のみを実施しました。



アジア・中東理解講座

「MIYAZAWA」欧州ツアー

各国で大反響。ロックバンド
「MIYAZAWA」による欧州ツアー。

舞台芸術分野では邦楽や伝統芸能のほか、演劇、ジャズ・ポップスなど各分野で計35組のアーティストの海外派遣を実施。特に大きな反響を呼んだのが、歌手の宮沢和史氏を中心とするロックバンド「MIYAZAWA」による欧州4ヶ国ツアーです。2005年1月のパリ日本文化会館を皮切りにブルガリア国立文化宮殿やモスクワ芸術座など、フランス、ブル

ガリア、ポーランド、ロシアの計5都市でライブを開催。日EU市民交流年、日露修好150周年記念事業として全都市で現地の人気アーティストと共演しました。ツアー中には各地の共演者とのコラボレーションによる新曲「ひとつしかない地球」をレコーディング。またツアー終了後は各共演アーティストの来日公演も実現するなど、日欧のアーティストによる交流は日欧各国で大きな話題となりました。



欧州ツアーライブ

漫画展

第9回アジア漫画展
アジアのIT事情をテーマに開催。

漫画という親しみやすい表現を通してアジアの社会・文化や人々の暮らしなどを多面的に紹介することをめざし、1995年以降、毎年「アジア漫画展」を開催しています。第9回展のテーマは「アジアのIT（情報技術）」。アジア各国は各分野にわたり着実にグローバル化が進むなかで、ITを社会、生活、ビジネス、教育、産業などあらゆる分野に活用すること

により、豊かな社会の建設をめざしています。本展では、アジア8カ国（中国、インド、インドネシア、日本、韓国、マレーシア、フィリピン、タイ）の第一線で活躍する8人の漫画家が、個性豊かな表現で、自国のIT事情を描いた新作（80点）を紹介。これらの作品を国内8都市（東京、福岡市、つくば市、千曲市、小平市、徳島市、大阪市、さいたま市）で紹介したところ、各地方共催団体や入場者からも好評を得るとともにマスコミでも数多く取りあげられました。



漫画展（会場：徳島県立21世紀館）

SOI Music Festival

現代的な芸術が受け入れられて
横浜トリエンナーレへの参加も決定。

日本とタイのインディーズ系音楽を紹介することを目的に、2004年9月10日から15日まで、SOI Music Festivalが開催されました。9月には、バンコク日本文化センターと現地との共催によりバンコクで実施、10月には本部助成のもと、東京で実施することができました。

日本からは、Spank Happy、Cornelius、タイからはModern Dog、Futonなどが参加

し、主要な新聞すべてに、記事として取り上げられるほどマスコミの関心を引き、好評を博しました。

特筆すべきは、2005年横浜トリエンナーレのキュレーターが、タイのこうしたコンテンツポラリニアートシーンに興味を抱いたことです。さらに、この文化芸術交流事業は、展示や公演の要素を加味して、バンコクのポップな世相を表現するために、SOI Projectとして同トリエンナーレに参加することに決定しています。



バンコクでのコンサート風景